

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	鋤田智彦
論文題目	満洲字表記の漢語に基づく近世中国語音の研究 『満文三国志』を資料として
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、中国語音韻史研究の立場から、清初の順治七年(1650)刊の『満文三国志』ilan gurun -i bitheに見られる満洲字表記の漢字音を整理帰納して、当時の中国語の音声について考えたものである。具体的に言えば、明刊『三国志演義』との対照のもと、『満文三国志』中の満洲字表記の漢語の地名・人名、官職名及び一部の一般名詞を漢字に同定したのち、二字や三字の地名・人名であればそれらを一字ずつに分解し、そのあと各漢字を中古音(隋『切韻』の音韻体系)の枠組みを使って整理・分析するという方法を取っている。常用字の場合、その出現回数は数千回に及ぶ。</p> <p>序章では、満洲文字についての考証が為される。1599年にモンゴル文字に基づく無圏点満洲字が使用されるようになり、その後1632年に至り改良され有圏点満洲字となることなど、文字成立の歴史や研究史を簡潔にまとめ、『満文三国志』が満洲語文献としてもかなり早い段階の資料であることを強調した。</p> <p>第1章では『満文三国志』の成立、版本について考証。先行研究(特に岸田文隆氏の論著)をよく咀嚼しつつ、編纂の経緯が詳しく辿られる。順治年間『満文三国志』が明・嘉靖本『三国志演義』に基づくこと、清・雍正本の満洲語部分が順治本の写しであり、漢字原文の部分は『李卓吾先生批評三国志』に基づいている可能性があること、順治本と雍正本以外に数種の写本もあること、そのほか朝鮮王朝の満洲語教科書『三訳総解』が『満文三国志』の一部を朝鮮語訳したものであること、などが的確に説明されている。本章の後半は満洲字表記の方式やローマ字転写、そして満洲語自体の音韻に対する説明である。漢字音専用の満洲字の転写については、時にメルレンドルフによる転写法に修正を加え、より整合的なものとした。</p> <p>第2章では、本論文で参照された近世語音諸資料についての解説が為される。『満文三国志』以前のものとして『中原音韻』『四声通解』『韻略易通』、ほぼ同時期のものとして『西儒耳目資』『韻略匯通』、そして後の時代のものとして19世紀の『語言自邇集』を選び、それぞれの音韻体系を簡潔に説明した。</p> <p>第3章からが本論ともいえるべき部分である。まずは『満文三国志』における声母表記が詳しく分析される。中古音の枠組みを使って各漢字の音を整理、出現の頻度により一般的な対応と例外に分け、更に例外について一つずつ考察するという手法を採用。例外的対応については、単純な書き間違いの可能性を指摘した例もかなりあるが、音韻史研究にとって重視されるべき例も多い。</p> <p>いわゆる「尖団の区別」と関連する議論は特に精緻である。北京などの北方方言で[ki- k^hi-xi-] (団音系)と[tsi- ts^hi-si-] (尖音系)がともに舌面音化を起し[tei-te^hi-ci-]の音になるのが、ちょうど明末清初の頃のことと言われており、実際に尖団関連の表記の揺れを多く見せる『満文三国志』は貴重な資料となる。複雑な状況の中に一定の法則性を見出し、舌面音化の過程に関して有力な説を提出しえたことは高く評価される。</p> <p>これと関連して、同じ字に対して異なった音が付けられている場合の分析も説得力に富む。同じ時期の発音の揺れという可能性のみならず、出現する章回によって音が違う場合(たとえば「夏」「県」におけるhi-とsi-)、複数の翻訳者が存在する可能性を指摘、また、語の使い分けに対応している場合(たとえば「経」の場合、経書の意ではging、人名ではjing)、漢字音を取り入れた時期の違い、即ち層の</p>	

違いによるものと推定した。

第4章では韻母の表記を撰ごとに詳しく分析した。第3章と同様の手法により、一般的な対応を示したのち、例外について一つずつ考察、ここでも様々な状況を想定し、各例において最も説得力を持つ可能性を提出している。具体的には、三等韻の拗音介音の現れ方、二等開口牙喉音、三四等合口韻母、止摂開口知組字などに関する分析において、新たな知見を提供した。現代北方方言に特徴的な一連の音が『満文三国志』にいち早く出現していることに対する分析も興味深いところである（「大」「累雷内」「巽」「尹」「軒」「風」「貞」「彪」「尋」など）。なお近世音研究において特に問題の多い入声については別に一節を立てて詳論した。

第5章は順治本と雍正本との間における表記の差違についての分析が中心となる。雍正本の書き誤りの多さを指摘する一方、順治本の間違いを修正した箇所があることも明らかにした。現代北方方言に特徴的な音が雍正本で始めて現れるという例も幾つか（「瑞」など）見出している。尖団の区別の問題に関しては、雍正本の方が順治本より却って保守的であることを指摘、18世紀初に進められた満洲字による漢字音表記の規範化との関連を論じた。

終章は全体のまとめとして、『満文三国志』の翻訳者および漢字音の基礎方言について考えている。後者については北京語・南京語のような有力方言のほか膠遼官話なども検討の列に加えている。巻末には、本論文で分析された順治本『満文三国志』のすべての漢字音の字表が掲載されていて資料的価値が高い。

以上のとおり、本論文は『満文三国志』の漢字音に関する全面的な研究として相当完備したものである。同時代あるいは前後する時代の資料との比較という面でやや物足りないところがあるものの、本論文が満洲語資料を使った近世中国語音韻史研究に着実な前進を齎したこと、そして、付載資料と相俟って、今後同方面の研究をする者の必読文献となるであろうことは疑いないところである。よって本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与されるに値すると判断する。

公開審査会開催日	2013年6月1日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学教授	博士(文学)早稲田大学	古屋 昭弘
審査委員	早稲田大学教授		柳澤 明
審査委員	大東文化大学教授	博士(文学)早稲田大学	寺村 政男
審査委員			
審査委員			